曲目解説

行進曲「威風堂々」の作曲者として知られるエルガーは，１８５７年イギリスのウスター近郊で生まれた。父はローマ・カトリック協会のオルガン奏者で，エルガー自身も幼い頃から音楽を愛好したが，父の勧めにより１６歳のとき法律事務所に勤めた。しかし，その後音楽に進むことを望み，ほとんど独学でピアノ，すべての弦楽器，ファゴット，そして作曲を習得し，ウスターのグリー・クラブの指揮者，ウスター精神病院付きの楽長職を得た。１８８５年父の後継者として教会のオルガン奏者となり，さらに１８８９年にキャロライン・アリスと結婚した後，本格的な作曲活動に入った。「弦楽セレナード」は，１８９２年，３回目の結婚記念日に妻へのプレゼントとして作曲された。曲は，短いながらも大変美しい旋律を持ち又各パートとも丁寧な書き方がなされており，簡潔で充実した作品に仕上がっている。

リヒャルト・シュトラウスは，ミュンヘン宮廷楽団のホルン奏者フランツ・ヨーゼフの長男として，１８６４年に生まれた。４歳の時からピアノによる規則正しい音楽教育を受け，早くも６歳でピアノ曲や歌曲の作曲を行った。そして，１６歳で交響曲ニ短調を書き上げるなど，まことにめざましい才能をみせている。「１３管楽器のためのセレナード」は，１８８１年１８歳の時に作られたものである。メンデルスゾーンやブラームスの影響も見られるが，冒頭のメロディーや，やや官能的な倦怠と興奮の交錯する中間部などに，後年のシュトラウスらしい雰囲気が醸し出されている。曲は，ソナタ形式で書かれており，よくまとまっている。特にコーダの色彩感と和声進行は実に印象深いものである。

ラヴェルは，第１時世界大戦に従軍している。熱烈な愛国者だったラヴェルは，「あなたはフランスにとって大切な芸術家だから」という軍部の丁重な拒絶を押し切って志願したのである。そして，看護兵として戦火の中で働くかたわら作曲され，１９１７年ラヴェル４２歳の時に完成されたのが，ピアノ組曲「クープランの墓」である。曲はフランス・バロックの巨匠クープランの名を冠してあるように，古典組曲の形を借り，それに斬新な感覚や手法をもりこんで作り上げられている。各曲には，この戦争で戦死した友人や知人の名が記されており，ラヴェルはこの曲によって，フランスの伝統と尊い命を捧げた戦士たちを賞賛しようとしたのであろう。どの曲も優美あるいは軽快な中にも一抹の憂愁が漂っている。ピアノ組曲は６曲から成っているが，ラヴェルはその中から４曲を選び，１９１９年にオーケストラのために編曲した。珠玉の響きというべき仕上がりである。

ワーグナーがメンデルスゾーンを評して「第１級の風景画家だ」と言ったことはよく知られている。確かにメンデルスゾーンの音楽は，洗練された詩的な想念がいかにも絵画的に表現されており，「音の風景画家」と言われる通り，風景あるいは印象描写の大家であると思わせる。交響曲第４番「イタリア」は，そうしたメンデルスゾーンの特色が最もよく示されている作品の一つである。メンデルスゾーンは１８３０年（２１歳）の１０月から翌年４月にかけて，イタリアに旅行したが，彼にとってイタリアは，自分の住んでいるドイツや以前に旅行したイギリスとは全く異なった別世界であった。さんさんと照りつける明るい太陽の下，色彩感あふれる